

巻頭言

なぜ AI と倫理なのか (自問自答)



武田 英明

(国立情報学研究所)

COVID-19の流行によって、世界のありようが一変してしまったことは誰しも感じるころだろう。疫病としての怖さ、被害はもちろんのこと、その拡散を防ぐための社会的な変化はこれ以前では全く想像し得ないものである。移動すること、人と会うことを避けることが強要され、オンラインでの社会生活が突如として始まった。ただ、興味深いことに、この変化において技術的には何も新たなものは必要とされなかった。オンライン会議のシステムはすでにあったし、その利用者の急増もクラウドで対処可能であったし、インフラであるインターネット環境も基幹も末端もオンライン会議の急増におおむね対応可能であった(もちろん個別のサービスの維持に多くのエフォートが必要で、そのエフォートには感謝)。要はこれまで単に使わなかっただけである。そして、この事態に直面して、世界中で突如として利用を始め、またたく間にオンライン社会生活に切り替わった。変容したのは社会や生活だけでなく、我々の社会生活に関する認知も変容している。例えば、多くの人にとって、人に会うこと、あるいは社会で働くということの意味や価値は多かれ少なかれ変わっている。リアルに会うことの価値は今まで以上に上がっている一方、会うことによるリスクも上がっている。あるいは、距離の概念も変わってきている。航空機の発達によって世界はつながれ、多くの人々によって地球上の距離はかつてないほど縮小した。それが突然、旅客機は止まり、国境は封鎖され、地球上の距離の感覚は100年前の船旅の世界に舞い戻ったようである。一方で、オンラインなら世界はいまだかつてなく狭くなった。このアンバランスさが今の世界の距離感である。多くの人がこのようなドラスティックな変化を身をもって感じているだろう。ここに見えるのは、技術と社会と認知のトライアングルのダイナミクスである。今回は、以前からあった技術を社会が(半ば強制的に)受け入れ、すると認知が変わった。この変わった認知は新しい社会の形成を促し、また新しい技術の生成を促すだろう。もちろん、このような転換はインターネット・Webの普及においても起きているのだが、今回は急激に起きたという点でもよりその変化が見えやすくなっている。

筆者は6年前に本学会倫理委員会の委員になり、2年前より委員長という立場にある。正直、筆者はこの委員会に全く興味がなかった。筆者は一研究者として、研究をすること、技術を追求することに興味はあったが、社会との関わりについては極めてナイーブであり、興味の外であった。しかし、委員会でさまざまな方と議論を交わし、また安全保障との関わり合い、人間の尊厳との関わり合いなど、多様な視点で考える機会があり、技術、ことにAIの社会との関わり合いを多く考えるようになった。上の例で見たように、技術は社会を変え、我々の認知を変える。もちろんその逆も然り。ことにAIは人間と近い領域での適用が想定されるだけに、より影響は大きい。それはさまざまな側面で影響を与え得る。

筆者が委員長になってからは、ことにAIと社会の関係に注目して活動をしてきたつもりである。AIは素晴らしい社会をつくる大きな力となり得ると同時に、社会や個人と複雑かつ危うい関係があり、その関係をきちっと受け止める必要があるということも共有できればと思っている。一般に、倫理委員会という何か規制をするといったネガティブな印象があるが、未来のAI技術と社会・個人の間を考えると、現在何かを規制するという点より(もちろん時と場合によってはそれも必要であろう)、どんな方向に行くことが良いのかという未来に向けての議論が重要だと思っている。このため、倫理委員会では昨年度、AI ELSI賞という賞を創設し、今後の研究や社会との関わり方に貢献している活動を表彰することにした。第1回は、神畷敏弘氏(国立研究開発法人産業技術総合研究所)の「AIの公平性に関する一連の研究」と「AIの遺電子」(秋田書店)の著者である山田胡瓜氏を表彰した。第2回は2021年度に実施予定である。

また、今年度の全国大会では「人を“よみがえらせる”技術としてのAI創作物:AI美空ひばりとAI手塚治虫を例に」という企画を行った。亡くなった人へ思いを技術が具現化できるようになったとき、我々はそれをどのように受け止め、あるいは利用していけばよいかという議論を行った。そこでは故人本人の願い、遺族の思い、社会からの期待、法律など、未整理の矛盾する視点があることがわかった。故人のデータ利用はまだ一般的とはいえないが、ある技術変化あるいはある社会的変化で急に一般的になるかもしれない。そのとき、我々は人の死をどう受け止めるか、死に対する認知の変容が起こるだろう。AIと倫理という問題は、けっして遠い未来やAIビジネスだけの話ではなく、我々の日常にも関わる問題だと思っている。